ISSN 2435-8193

東京大学大学院総合文化研究科　グローバル地域研究機構中東地域研究センター
［スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座］

UTCMES ニューズレター

VOL.20　2022

1. この一品――私の研究モノ語り　谷 憲一 ・・・・・・・・・1
2. 学びの寄港地　木村風雅 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
3. 駒場中東セミナー開催報告 ・・・・・・・・・・・4
4. バフワーン文庫より：5年目の節目に これまでの文庫の軌跡を振り返る（後編） ・・10
5. センターの活動紹介 ・・・・・・・・・・・・・12
6. スタッフ・発行者情報 ・・・・・・・・・・・・12

1. この一品――私の研究モノ語り

前号からはじまった新連載「この一品――私の研究モノ語り」も2回目となりました。文学、建築学から文化人類学と続いてくるとあらためて「中東研究」の多彩な側面が見えてくるのではないでしょうか。今号の「一品」は意外なモノからはじまっています。

（1）この一品
――「バーベル：身体鍛錬と研究」

上智大学アジア文化研究所
共同研究所員　谷 憲一

私が自身の研究と切り離すことができないモノは筋トレの器具――バーベル――である。厳密に言えば、これは連載の趣旨とは少しずれてしまうかもしれない。というのも、特定のモノを私が大事に所有しているというよりも、トレーニングの道具としてのバーベル一般を問題としているからである。けれどもある意味で、バーベルは研究対象と私自身の研究生活を広い意味で結びつけている。

私は文化人類学を専門とし、特にイランをフィールドにして人々の宗教的実践を対象として研究を行ってきた。とはいっても、先日博士論文の口頭試験を無事に終えたばかりの新米研究者である。

一橋大学の博士後期課程に進学後、まずは調査に必要なペルシャ語を学ぶためにテヘランに滞在した。その後、長期的な滞在のためにテヘラン大学の修士課程に進学し、そこでペルシャ語で論文を書いて学位を取得した。それと並行しながらイスラーム太陰暦ムハッラム月に行われる、シーア派のホセイン追悼儀礼の調査を始め、帰国後も何度か日本とイランの間を行き来しながら調査を継続して博士論文を書き上げた。執筆期間には（というよりそれ以前も今もだが）、気分転換や健康維持のために、毎日の日課としてウエイト・トレーニングを行ってきた。自室には、新型コロナでの緊急事態宣言が初めて発出された時に購入したバーベルとベンチ、そしてバーベルを置くためのラックがあり、自分でトレーニングメニューを組んで、ほとんど毎日トレーニングを行っている。執筆活動を続ける上で、体を動かしている最中に分泌されるドーパミンが精神衛生上も有益である、と少なくとも自分では思っている。

そもそもトレーニングを本格的に始めたのは、イランでフィールドワークをしている時だった。そしてテヘランに住んでいた時にも、私はバーベルを所有していた（当然、今自宅に所有するモノとは違うモノである）。当時は気分転換もかねた体力づくりを主な目的としてトレーニングをしていたのであるが、思い返せばそれは私の調査とも、思わぬ形でつながっていくものだった。

2013年に、テヘラン大学付属の語学学校でペルシャ語を学んでいた頃、テヘラン大学のメイン・キャンパスの北にある男子学生寮で2か月ほど生活した。夏休みの時期で、多くの学生は実家に戻っているために寮はガラガラだったのだが、実家に帰っていない少数の学生が生活していた。私もそこで一室を借りて昼間は語学学校に通っていた。夜になると同じフロアにいるイラン人の学生や語学学校に通っていたトルコ人の学生と集まって紅茶を飲みながら語り合った。その時、私はまだペルシャ語で十分に会話をすることもできなかったにもかかわらず、それでもいまだに付き合いのある友人を見つけることができた貴重な時期であった。寮がある敷地内には食堂や売店、クリーニング屋など生活に必要な施設がそろっていた。そして、その中にウエイト・トレーニングのためのジムもあった。友人となったイラン人の学生に誘われて、夜はジムに行って動作を教えてもらいながらトレーニングをするようになった。スポーツは言語を超えるのである。9月になると他の寮へ引っ越したのだが、幸いにもその寮の隣がテヘラン大学の別のジムであった。イランのジムではイスラームの規範に従っ

て、男性と女性は別々の場所で運動しなければならない。そのジムは週に3日、隔日で男性が利用することができた。私はそこですっかりトレーニングの習慣を身につけ、日本に帰国してからも購入したダンベルでトレーニングを続けていたのであった。

2014年に再びイランに行き、私はテヘラン大学の修士課程に進学した（専攻はイラン研究）。その時はまずメイン・キャンパスの近くにある外国人寮に住むことになった。そこではアフガニスタンをはじめ、主に近隣諸国から来た留学生が生活していた。その時も、トレーニングを毎日行うためにバーベルを購入することにした。テヘランの街を南北に走る高速バスに乗って南端の鉄道駅まで行く道中に、スポーツ用品店が立ち並ぶ地区（モニーリーイェ）がある。ある日ふらっと立ち寄り、値段も手ごろだったのでそのままバーベルのバーとプレートを購入した。当時は所持金も少なかったためタクシーには乗らず、バーベルのバーとプレートを持ちながらバスを乗り継いで寮まで帰った。汗をかきながらもなんとか一人で運んだのを覚えている。寮生たちはその様子を訝しげにみていた。

その後、2015年の夏からテヘラン大学で知り合った友人と家を借りてルームシェアをすることになった。家と言ってもテヘラン西南部にある住宅の屋上にある簡素な小屋だった。下の二階建ての建物では大家の家族が暮らしていた。狭い家だったが、小屋の前にはちょっとした庭のようなスペースがあり、引っ越しの際にバーベルも一緒に持ってきてそこに設置した。運動後にバーベルを下に置くときに響かないようにそっと置くことを心掛けてトレーニングを行っていた。最初のうちは大家も筋トレ器具を持ち込んでいる日本人の私を奇妙なものを見るような目つきで眺めていた。しかしある日、置いていたバーベルの前に鏡を設置し、さらに大家が持っていたダンベルを隣に並べて、ちょっとしたジムのような環境を作ってくれたのだった。

イランに滞在していた間にも、このようにバーベルを使ってトレーニングに勤しんでいたのであるが、鍛えた身体が実際に研究に役立つこともあった。イランでは毎年ヒジュラ太陰暦のムハッラム月になると、シーア派第三代イマーム・ホセインの追悼儀礼が盛大に行われる。私の住んでいた地区は儀礼が盛大に行われていた。儀礼の開催単位となる集団であるヘイアトが街のあちこちにあり、夜になると各ヘイアトが集会をしたり路上行進を行ったりしていた。私は自宅の近くのヘイアトの活動について調査を行っていた。路上行進の中でまず目を引くのが「アラーマト（‘alāmat：標識）」ないし「アラム（‘alam：印）」と呼ばれる、プラカードのような器具である。アラーマトは金属製の柱を組み合わせて作られ、一本の柱だけで立つ形になっている。そして、その上に動物をかたどった金属製の彫像や、刺繍が施された布、鳥の羽などによって装飾されている。子どもが持ち上げる小さいサイズのものから、大きいものでは重さが150キロを超えるものまである。路上行進では、力自慢の男たちが交代でこのアラーマトを担ぎ（革でできた専用のベルトを腰と肩に巻き付け、それを支えにして担ぐ）、街を練り歩く。

ある時、ヘイアトで私に気をかけてくれた一人の中年の男性が、アラーマトを担いでみないかと誘ってくれたので、私は持ち上げてみたいと答えた。そこで、アラーマトを持ち上げていた男性にお願いしたところ、ヘイアトの上の人が許可したなら交代してもいいよと言われた。しかし、その表情は私がアラーマトを担ぐことをあまり歓迎していないようであった。そこには、得体のしれないよそ者がアラーマトを持ち上げることができるのか、という疑念があったようにも感じた。実際、私自身もうまく持ち上げることができるかどうか不安だったのである。いざ持ち上げることになると、男たちが私の身体にベルトをきつく巻き付けてくれた。持ち上げる人が交代するときには他の男たちがアラーマトを持って支え、持ち上げていた人は差し込み棒からベルトを抜く。そして次に持ち上げる人がアラーマトの下に入りこんで棒をベルトに差し込んだ上で、アラーマトを持って、倒れないようにバランスをとる。重量もあるためバランスを取りながら歩くことは難しい。私もなんとかバランスを取りながらアラーマトを持って数メートル歩き、次の人に交代した。その後にはヘイアトの男たちが労いの言葉をかけてくれて、彼らとの心の距離が少し近づいたような気がした。

このようにイランに来てから健康のために行っていたトレーニングであったが、思わぬ形で自分の研究対象の人々の輪の中に入り込めるきっかけにもなった。文化人類学では、長期のフィールドワークを通じて研究を進めることが一般的である。その含意は現地の人々と共に実際に生活し、その中で研究テーマを定めて探求していくということにある。そこで重要な点は身体性である。言わば人類学的なフィールドワークとはなによりも調査者が自身の筋肉を通じて対象に迫り理解しようとする営みなのである。

そもそもイランにはズールハーネという心身鍛錬の伝統があるし、また現在ではボディービルディングも盛んである。ホセイン追悼儀礼で行われる胸叩きや鎖叩きでも躍動的な動きによって力強さが誇示される。力強くあることは、イランの男社会の中で一人前として認められる重要な要素の一つでもあると言えるだろう。

そのためか道を歩いていてもたくましい体つきの男性とすれ違うことも多いように思われる。食事についても、肉の串焼きであるキャバーブや塩味のヨーグルト飲料であるドゥーグなど高たんぱくの食事が日常的で、トレーニング後の栄養摂取にも適している。

私は今、日本にいるけれども、イランに関する文献を読むことと並行しながら、身体を鍛えて自分で作るイラン料理を食べることで、イラン社会についての理解を深めようと心掛けている。

【私の研究室】

私が昨年まで所属していた、一橋大学大学院社会学研究科・社会人類学研究室では、各院生が社会（・文化）人類学をメイン・ディシプリンとしながら、さまざまな地域をフィールドとして自身の研究を進めています。個別的・具体的な対象を扱いながらも、普遍的なテーマについても議論することができるのが人類学の特徴であり魅力であると考えています。

2. 学びの寄港地

趣旨説明

留学や現地滞在を通してはじめて得られる新しい学びを、本コーナーでは紹介していきます。「寄港地」というタイトルは、港町であるオマーンの首都マスカットをイメージし、日本から中東へ、また反対に中東から日本へと渡航する若手研究者の活動を取り上げます。

イスタンブール教育研究時報２

東京大学大学院人文社会系研究科・
日本学術振興会特別研究員（DC1）
木村 風雅

本稿は、筆者によるUTCMESへの２度目の短期留学報告（トルコ・イスタンブール）となる。前回はコロナ禍が始まる前の2019年の８月から９月にかけて研究滞在した時の様子を、2020年刊行の第16巻に寄稿した。前回の原稿では、主にイスタンブールのヨーロッパ側の地区であるスレイマニエ・ファーティヒ地区における大学・研究機関と伝統的な宗教学校や私塾（マドラサ）の混淆の様子を描写し、イスタンブールでも随一のイスラーム学古典を扱う書店などを紹介した。

私事となるが筆者は現在、スンナ派４大法学派の１つであるシャーフィイー学派の法理学（usūl al-fiqh）における教友（主に預言者ムハンマドの生前の弟子たちを指す）の学説の位置づけと機能を研究している。現代ではシャーフィイー派が有力な地域として東南アジアを想起しやすいが、同じくスンナ派４大法学派の１つであるアブー・ハニーファ学派が有力なトルコ共和国においても、比較法学の視点からシャーフィイー学派への関心は絶えない。

前回の原稿でも紹介したIbn Haldun大学の前学長・現社会学部教授のRecep SENTURK氏は今回の滞在で筆者に対し、「トルコにおけるイスラーム学教育ではアブー・ハニーファ学派のみを教えているのではないかと言われることがしばしばあるが、我々はシャーフィイー学派の教育・研究プログラムも用意している」と語った。また、トルコの観光誘致の素材として街頭や交通機関の内部でもしばしば目にする「旋舞集団」としてのメヴレヴィー教団（現トルコ・コンヤで活動した13世紀のスーフィーであるルーミー（Jalāl al-Dīn al-Rūmī, d. 1273）を祖とするスーフィー教団）の神秘思想・詩作・旋回修行が前面に押し出される一方で、シャーフィイー法学派を代表する学者の１人であるガザーリー（Abū Ḥāmid al-Ghazālī, d. 1111）の倫理学的なスーフィズム思想がオスマン朝期の注釈書を経ていかに現代のトルコのイスラーム学徒にまで読み継がれているかは十分に脚光を浴びていない。

上記のRecep氏の言葉は氏が2021年に創設したUsul Academyの理念と実践を語ったものであるが、ここでは今日日本でも頻用されるようになっている社会や世界の「分断」が意識されている。彼が創設した教育・研究機関では上記のようにカリキュラムの中で法学派の分断を埋め合わせようとするだけでなく、近代的な大学教育（または実証的な学問）と伝統的なイスラーム学教育を橋渡しすることが意図されている。というのも、日本と同様に世俗国家を謳うトルコでは、大学・研究機関におけるイスラーム学研究と、オスマン朝期からの歴史を受け継ぐとされるモスクに付属する（あるいはモスク周辺に点在する）私塾としてのマドラサがこれまで分断していたからである。

前回の原稿においても示したように、このような教育機関の分断は、学生や教員の容姿（衣装）に可視化されている。トルコでは弁護士や医師に並び、大学教員のステータスを社会で可視的に示す要素の１つとして、男性はスーツを着込むことが社交の要諦とされる（＊トルコの国立大学で教員を務める日本人研究者山本直樹氏の談）。一方で、伝統的な宗教学校の教員や生徒の多くは長衣にターバンの出で立ちで街を闊歩している。なお、日本も含め近代的な大学においては留学生の受け入れ実績が大学の評価軸の１つとなっているが、伝統的な宗教学校の教育を求めてトルコに集う留学生も少なからず存在する。特にトルコから地理的に近いアゼルバイジャンやカザフスタンなどコーカサス・中央アジアからの学生や、ロシアからの学生も存在する（＊今回の滞在で知り合ったロシアからのマドラサ留学生はyoutuberとして自らの留学体験などを発信しているyoutu.be/6HXiCVXAeCo）。

先述のRecep氏はIbn Haldun大学で教授職を務める一方で、自ら創設した教育・研究機関に複数携わっているが、このような例がトルコでは少なくない。というのも、トルコと同じくムスリムを多数抱えるインドネシアでは国立大学で宣教に関する学部・学科を有する（＊例えばUniversiti Kebangsaan Malaysia）のに対し、世俗国家のトルコにおいて大学（特に国立大学）でイスラームの宣教を学び、教えることは基本的にあり得ない。したがって、価値中立を謳う世俗的な大学では果たし得ない自らの宗教的な理念に紐づいた学びや活動はワクフ（寄進）などをもとにした教育・研究団体に求められ、大学教員や学生は大学の枠組みを超えてこれらの活動に参加することが多く、学術研究活動に「２つの顔」を持つことがしばしばある。

筆者が専攻とするイスラーム学（イスラーム古典思想）という分野に限って言えば、大学でイスラームの古典思想を研究する者も、伝統的な宗教学校で教え学ぶ者も手にする古典は等しく、一同に知識を求めて書店に集う。海外の研究者の御用達でもあるファーティヒ地区にあるイルシャード書店（İRŞAD KİTABEVİ）はコロナ禍でも変わらずの活況を呈していたが、前回の時報で紹介したチャルシャンバ地区のアラビア語書店であるMUALLIN NEŞRIYATは閉店していた。他にも伝統的な宗教学校の学生が多く存在し、シリア人が多く住むアラビア語が交わされる地区として知られるファーティヒ地区では、コロナ禍を挟む2年間で街のシンボルであるファーティヒ・モスクの面前の大通りの店の閉店が目立った。

筆者が今回滞在した2021年の11月末から12月半ばまでの間にはトルコリラの暴落が生じ、パンなど主食のインフレが生じて、価格維持が難しいパン職人などのストライキも報じられた。トルコリラの乱高下から自国通貨をあてにできないトルコ国民は、普段からこのような事態に備え自国通貨での預金を金貨や米ドル・ユーロに替えるなどして貯蓄していると聞いていたが、家賃などの計算も米ドルで換算していた光景は筆者を驚かせた。

コロナ禍の影響は経済的な側面のみならず、大学・研究機関や宗教施設などを含む社会全体にも及び、現在トルコでは渡航者もHESコードと呼ばれる二次元コードを発行しなければバスや電車など公共交

通機関を利用できず、大学の入構にもワクチン接種証明が必要となることがある。前回紹介したイスラーム関連書籍が最も充実している図書館の１つであるİSAM図書館も予約なしでは入館できない。また、イスタンブール空港に付属の礼拝施設では使い捨ての紙製サッジャーダ（礼拝用絨毯）が特設されていた。

以上のようなコロナ対策が敷かれ、人口約8,400万のトルコ国内で毎日２万人程度の新規コロナ感染者が出る中においても、少なくとも筆者が訪問した国立・私立の大学や研究機関では外国人研究者の訪問（＊筆者の他にインドネシアから出張している研究者もいた）や留学生の動きを止めておらず、最大限の研究支援や協力が歓迎の意とともに得られた。今回の研究滞在では、国立マルマラ大学の神学部でゲスト講義として東アジアの宗教とイスラームをはじめとする一神教を比較する講義を行う機会を得た。古典イスラーム思想を専門とする日本人に求められることとして、専門領域の話題だけでなく、自らの母国や地域環境の歴史と研究対象を対比して世界史的な視座から大きな語りを求められることは当大学だけでなく現地の研究者との交流で最も実感することの多い課題である。大陸から分断された極東の日本が、西アジアの一端とどう結びつくのかを考える日々は続く。

（本稿はJSPS科研費19J21377による研究成果の一部である。）

3. 駒場中東セミナー開催報告

2021年度駒場中東セミナーは、「中東と遺産：文化・歴史・信仰の展開」を連続テーマとし、全13回をオンライン上のウェビナーにて開催しました。2022年度はオマーン・日本国交50周年を記念したセミナー、シンポジウムを企画しています。引き続きご期待ください。

第6回　2021年10月2日（土）
『前近代エジプトにおけるコプト聖人：古代エジプトとイスラームのはざまで』
辻 明日香（川村学園女子大学）

今回のセミナーでは、川村学園女子大学の辻明日香氏が、古代の多神教とイスラーム文化のはざまにある、エジプトのコプト教会についての講演を行った。

冒頭では、エジプトにおけるキリスト教の歴史と、その解釈について概説した。エジプトにキリスト教が広まったのは３世紀である。キリスト教が社会的に優勢になった後も同地では古代エジプトの多神教信仰が残っており、特に、ホルス神の母であるイシス神に対する信仰が、キリスト教における聖母マリアへの信仰と似通っていた。これがエフェソス公会議における、マリアを「神の子イエスの母」と扱うべきか、「人の子イエスの母」と扱うべきかという、神学論争の原因の一つになっていた。

こうした現象が、多神教との共存か、対抗の末の奪取か、シンクレティズム（異なる宗教観念の混淆）かについては、歴史学者の間で論争がなされている。例えばDavid Frankfurterは、多神教社会の信仰が、古代ローマからビザンツ期にかけて、キリスト教の中に混淆していったと主張し、批判を呼んだ。

一方、キリスト教とイスラームとの関係に関しては、12-16世紀のパレスチナ・シリア・アナトリア半島などで、スーフィーの布教によるイスラーム化の発展の中で、キリスト教とイスラームが空間を共有する現象が見られた。Tijina Krstićはこれを空間の共有というよりはイスラームによる信仰の奪取があったのではないかと述べている。

こうした議論をもとに、講演者は、13-14世紀におけるコプト聖人の活動について論じた。この時代には、社会のイスラーム化が進むと同時に、現代でも崇敬される聖人が活躍した。他の時代とは異なる特徴として、アラビア語のコプト聖人伝が、集中して７点以上執筆・編纂されたことがある。これを踏まえ、聖人崇敬が古代末期からの継承なのか、この時代特有の文化なのかについて議論した。

聖人の代表例として、講演者は、「裸のバルスーマー」について解説した。カイロ生まれの聖人であり、腰布一枚で教会の梁の上で暮らし、屋根の上で修行していたという伝承がある。宗派や身分を越えて崇敬者を集めており、『バルスーマー伝』の奇跡録では、主に病気の治癒についての奇蹟が語られている他、蛇を手懐けたとも言われている。

こうしたバルスーマーの伝説が、古代の信仰やイスラームを意識したものなのかについては、意見が分かれる。例えば、屋根の上での修業は、柱の上で修行した５世紀の隠遁者、シメオンの伝承を継承したのか、同じく屋根の上で修行したスーフィー、アフマド・アルバダウィーを意識したのか。病気を治癒する際の食事療法、ハリネズミの血を塗る方法は、当時の民間療法や、古代エジプトの医学を継承したのか。蛇などの調伏は、古代の神官か、スーフィーを意識してのことなのか。特に、皮膚病や頭痛の治療は、スーフィーの治療法や、イスラーム文化が広がった近代エジプトの療法に酷似している。他のコプト聖人も、裸、動物を飼いならすなどの特徴が、スーフィーと似ている。これらの類似性が意図的なものなのかは議論の余地がある。

また、コプト期、そしてイスラーム期に流行した聖墓参詣も、古代エジプトの神殿参篭を継承したものなのかは、意見がわかれる。ユダヤ教徒やキリスト教徒が参詣していたが、最終的にモスクになり、他教徒の立ち入りが禁じられた「アブラハムのモスク」など、信仰の断絶を示唆する聖墓もある。

まとめとして、講演者は、現代のエジプト人は、「古代エジプトの文化を継承する私たち」を主張するために、文化の継続性を主張するが、13-15世紀当時の状況を正確にとらえるには、文化の奪取という視点も重要なのではないか、と述べた。

質疑応答では、コプト教会の詳細や、社会とのつながりについて、様々な質問が寄せられた。エジプトの聖人に、共通した特徴があるかという質問に対して、講演者は、聖ジョージや刀を2本持つ聖メルクリウスのようといった聖人が人気である他、生きている聖人に会いに行き、救いを求めるという慣習が現代においても生きていることに言及した。奇蹟録の読者層に関する質問では、アラビア語で書かれたものなので、宗派を越えて様々な人に読まれていた可能性があること、教会では聖人の日に聖人伝が読み上げられていたことを紹介した。コプト教会の社会的役割については、救貧などの公共性は重視されていたものの、社会に対し具体的にどのような貢献をしていたかについては、これからの研究が期待されるテーマであると述べた。

（上笹のぞみ・東京大学教養学部統合自然科学科認知行動科学コース）

第7回　10月13日（水）
『イスラーム哲学再考』
小林 春夫（東京学芸大学）

小林春夫氏は哲学史を専門としており、本セミナーは最近の研究進捗や学会報告を整理するという趣旨で行われた。

小林氏は2013年の中東イスラーム世界セミナー「中東の思想と社会を読み解く」において第10回「イスラーム哲学の転換点」の講師を担当されていた（こちらの内容は中東地域研究センターの2014年度版の報告書で確認できる）。氏ははじめに、2013年セミナーの内容を振り返った。「イスラーム哲学」はときに「アラビア哲学」とも呼称されることもある。確かに、アラビア語で記述はされているが、数学・科学などの普遍的なものではなくあくまでイスラームという文化・宗教のコンテキストのなかにおける哲学を語るわけであるから、「アラビア哲学」と「イスラーム哲学」はニュアンスが異なると語られた。ガザーリーによるイスラーム哲学批判以後、特にスンナ派の世界において哲学は衰退したという「12世紀終焉説」に対する有力なアンチテーゼとして、シーア派や神秘主義に哲学は脈々と受け継がれているといったH. Corbinの研究を紹介した。他方、H. Corbinに対する批判として、イスラーム哲学の主流はアリストテレス的合理主義とみるべきであり、アリストテレス主義の発展過程としてイブン・スィーナーを位置付け直すべきだというD. Gutasを中心とした研究が一定の成果をあげたことを紹介した。これによりイブン・スィーナーをアリストテレスからの延長の到達点として、イブン・スィーナー以降をPost-Avicennaとする見方が出来上がった。Corbinはシーア派に偏り論を広げたが、スンナ派についてはあまり関心を示していなかった。しかし、スンナ派に属する学者たちに12世紀以後も哲学が受け継がれているということがみえてくるようになった。スンナ派世界への着目がGutasの次の世代で取り上げられていくことになる。ここまでが2013年に小林氏が話された内容の振り返りである。

ここからは2013年以降の研究の進捗がどういうものであったか語られた。今回のセミナーでの問題の所在は大きく二つある。第一に、12世紀を分水嶺としてイスラーム思想史はどのような変化を経験したのか。第二に、イスラーム世界においてそもそも「哲学」とはどのように考えるべきなのかという大きなスパンでの問題である。小林氏は後者の問題に対する最近の研究の動向から対照的な二つのスタンスを紹介された。

一つ目は、F. Griffelの考え方だ。これは、イスラーム哲学がファルサファからヒクマへと12世紀に発展的な成長を遂げたというものだ。Griffelはガザーリーの重要性はイスラームにおけるギリシア哲学のnaturalizationのプロセスの始まりだととく。ガザーリーのTahāfut（哲学者の自己矛盾）が登場して以降、ファルサファはAvicennismと同義になったため、ファルサファを哲学と同定してしまうと12世紀以降のイスラーム哲学史を読み間違えることになる。ファルサファ＝イスラーム哲学と限定せず、それ以外のものに哲学が発展していったという見方が生まれた。

二つ目は、Gutasの見方だ。Gutasの見方によると12世紀以降の哲学は本来の哲学の働きを失って似非哲学(paraphilosophy)へと堕落したという。これらの二つの見方があるときに哲学をどのように捉えればいいのか、後期哲学の特徴を小林氏は紹介された。その特徴は、諸学問の越境と語られた。10世紀程からイスラーム世界では諸学問を分類・序列化しようという動きがあり、伝承的な学問と理性的な学問というように大きく分けられた。伝承的な学問はクルアーンに代表されるようなアラブ・イスラームに固有な学問であり、理性的な学問とは人間に平等に与えられた人間本性に基づく探究である。しかし、後の時代において、かつては伝承的な学問と数えられていた思弁神学（カラーム）が理性的学問と分類されるようになったことを例として、理性的な学問領域が伝承的な学問領域に飲み込まれるようになった。これが後期哲学の大きな特徴の一つだと小林氏は語った。

この学問領域の越境によりファルサファは他の学問と融合していくことになる。一つに、スンナ派のカラームは哲学化していくことになり、後期思弁神学（哲学的神学）を確立していく。その典型例として、バイダーウィーの『曙光』と、イージーの『宿場』が挙げられる。また、スーフィズム（神秘思想）とファルサファの融合が起こったこともこの時代の特徴として取り上げられた。他にも、シーア派思想との融合もあった。代表例としてはトゥースィーの『信仰の真髄』が挙げられた。後期イスラーム思想史のいろいろな流れを見てきたが、一つの集大成としてモッラー・サドラーが登場し思想の統合がなされた。小林氏は以上のような話の流れで後期哲学を振り返られた。

最後にまとめとしてこのようなイスラーム哲学史をどうみるのかについて語られた。小林氏は、Gutasのような規範的定義は哲学を議論する上で必要であると認める一方、後期哲学をparaphilosophyとまでする必要はないのではないかと語った。このときに参考になる考えとして、Sabra(1987)を引用した。Sabraはイスラーム世界におけるギリシア科学の展開を、当初の外来性が消え去ってイスラーム固有のものとの区別がつかなくなる状態にいたった、摂取と同化のプロセスとして説明した。ファルサ

ファでも全く同じと言えるかはわからないが、Sabraの考え方のようにイスラーム文化史を理解することは一定の有効性があるのではないかと小林氏は語った。

私のようなイスラーム文化・哲学に疎い者でも、イスラーム哲学の潮流・奥深さを覗き見ることができた。最近の研究進捗や学会報告を整理するという趣旨に適った内容の講演だった。

（長澤快門・東京大学理科Ⅱ類）

第8回　10月27日（水）

『アメリカでイスラームの伝統を学ぶ：スンナ派伝統主義の新たな展開』

髙橋 圭（東洋大学）

髙橋氏はエジプト及びアメリカの近現代のスーフィズムを研究テーマとしており、今回の講演は、2016年～17年に行ったサンフランシスコ・ベイエリアでのスーフィー系団体の現地調査などの成果を踏まえながら、近年アメリカで流行しているイスラームの新しい潮流について話された。

はじめに伝統イスラーム潮流(*1)について簡単な紹介があった。少し前まではイスラーム主義が影響力を持ってきたが、現代のアメリカではスンナ派の伝統を強調するイスラーム理解が盛り上がりをみせている。イスラーム主義がクルアーンとハディースという聖典から規範的な理解を導く原理主義と定義されるとすると、スンナ派伝統主義は古典イスラーム法学・神学・スーフィズムの枠組みに沿った解釈をイスラームの正当な教えとし継承・保持していくという立場である。この現象で興味深いのはアメリカの若い世代のムスリムから絶大な支持を受けているということだ。つまり、この潮流の中心的な役割を担っているのは改宗者や移民第二世代からなるムスリムたちだ。なお、1990年代半ばにアメリカに加えてイギリスやカナダを中心に展開してきたこの潮流の立役者は、1970年代に改宗し中東・アフリカで宗教諸学を学んだ欧米人たちである。

*1. この潮流を指す名称は定まっておらずneo-traditionalismと呼ばれることもあるが、この潮流の支持者たちがしばしば用いるtraditional Islamという言葉を使って伝統イスラーム潮流と呼ぶ。

次に、現代アメリカイスラームの歴史的背景と、伝統イスラーム潮流の位置づけについて語られた。19世紀末ごろから少数のムスリム移民が存在していたが、1965年の新移民法を契機に本格的にムスリムコミュニティが形成されるようになる。冒頭で触れたように、1970年代から少なくとも1990年代終わり頃まではイスラーム主義の影響が強かった。ただし、70年代以降のアメリカのイスラームがイスラーム主義一色というわけではなく、この時期にはスーフィズムがもたらされていた。スーフィズムの広がった背景には、ニューエイジと呼ばれるスピリチュアル運動の高まりがあった。80年代以降には中東からスーフィー導師が渡米してタリーカがもたらされた。伝統イスラーム潮流は直接的にはスンナ派伝統主義スーフィズムの流れを受け継いでいると見なすことができる。ただし、伝統イスラーム潮流にはニューエイジ的な要素はない。また、重要な特徴として、伝統イスラーム主義以前のスーフィズムではムスリムが多数派の地域出身の指導者が中心だったが、伝統イスラーム主義は改宗者や移民第二世代などのアメリカ生まれのムスリムが中心であることが挙げられた。

続いて、伝統イスラーム潮流の形成と展開について話された。この潮流は冒頭でも触れたようにイギリス・カナダ・アメリカの何人かの知識人たちが中心的な役割を果たしており、彼らと信奉者がネットワークで繋がることで展開している。知識人の中でも有名なのがハムザ・ユースフだ。ユースフは、伝統的な宗教諸学を修めた西洋人ムスリム学者として評判を集めた。ユースフが知られるようになった1990年代半ばには、各地を牽引する知識人や活動家を結ぶネットワークが形成されるようになった。このネットワークの役割を果たしたのがDeen IntensiveやRihlaなどの教育プログラムだ。一方、ユースフは、北カリフォルニアにおける伝統イスラーム潮流の拠点とも呼べるZaytuna Instituteという学校を設立している。

それでは、伝統イスラーム潮流が掲げる「伝統イスラーム」とは何を指しているのだろうか。まず、「伝統イスラーム」とは宗教諸学を通じて導き出された古典的なイスラーム解釈を指している。スンナ派ウラマーの権威を重視し、古典的イスラーム解釈が中世以来歴代のウラマーにより連綿と受け継がれてきたことを強調している。また、正統イスラームの要素にスーフィズムを組み込んでいることも特徴である。さらに、イスラームの伝統的な知識のみならず知識の伝達方法についてもこだわりを見せている。ここまでの特徴をみると、中世のイスラーム伝統にこだわるだけの復古主義的な潮流に見えるが、伝統イスラーム潮流は現代アメリカの文化とも親和性をもつものである。この理由の前提として、アメリカのムスリムの若い世代の間では宗教と文化を切り離す視点が共有されている。伝統イスラーム潮流にもこの視点が内包されており、伝統イスラームはエスニック文化と区別される純粋なイスラームとみなされる。純粋なイスラームは普遍性を持つのでどの地域の文化とも親和性があるという理解から、アメリカの文化にも十分適応できるとみなされることになる。

最後に、伝統イスラーム潮流が教育活動においてどのような活動を展開しているのか具体的な例が取り上げられた。Deen IntensiveとRihlaは、留学をしないようなアメリカの一般のムスリム向けの教育プログラムで、短期で伝統イスラーム教育を体験できる。Zaytuna Collegeは、前述したZaytuna Instituteを前身とした、学位授与を認められたリベラルアーツ・カレッジだ。ここではイスラームの学問に加えて西洋の学問の両方を学ぶことになる。伝統イスラームをアメリカ人が分かるように説くために、イスラームとアメリカの両方に通じた自前のウラマーを養成する機関といえる。

まとめとして、伝統イスラーム潮流は、伝統を対象化してアメリカ文化との両立を示し、実際に教育活動を通し実践していることにより、アメリカの若者ムスリムを惹きつけている。セミナーの参加者からも多くの質問を集めており、大変興味をそそられる内容だった。

（長澤快門・東京大学理科Ⅱ類）

第9回　11月13日（土）

『イバード派の建築とインスピレーション：ガルダイヤとジェルバ島を中心に』

松原 康介（筑波大学）

『イバード派における建築に関する規定と現代オスマンにおける文化遺産保護行政』

近藤 洋平（東京大学）

建築には、利用可能な建材、自然環境、諸規範が反映されており、人々の暮らしぶりを解き明かす様々な鍵が隠されている。

今回は、イバード派の建築を題材に、それがどのようにル・コルビュジェのインスピレーションを掻き立てたのか、そしてその都市空間について、及びその建築の規定と現代のオマーンにおける文化遺産保護行政について取り上げられた。

まず、前半は松原講師による、ガルダイヤとジェルバ島を中心としたイバード派の建築とル・コルビュジェに関するセミナーとなった。近代建築５原則を掲げたほどに近代建築の代表的な人物であるル・コルビュジェだが、晩年の傑作であるロンシャン礼拝堂は他の彼の作品とは一線を画している。長方形や正方形など多様な様相を見せる窓は幻想的な光の差し込み方を演出し、外観においても近代建築とは思えないほどの曲がりが特徴的である。この斬新なインスピレーションの源泉は、ル・コルビュジェがアルジェリアを訪問した際に目にしたガルダイヤ（ムザブの谷）のモスクにある。

現在では建築の聖地といわれるガルダイヤのシディ・ブラヒム・モスクは、代表的なモスクと異なる質素で小規模なモスクであり、日干し煉瓦と木材、白い漆喰で塗り固められている。ル・コルビュジェが取り入れたように、不整形で柔らかい建物であり、不揃いな大きさの窓も特徴に挙げられる。

また、松原講師はル・コルビュジェのインスピレーションのその先へ、と題して、都市空間についても着目した。「公私の分離」とよくいわれるように、建物の外見には無頓着でありながら、内側はしっかりとした整形の中庭で装飾を重ねるという都市空間の文化が存在する。これは、街区レベル、住宅レベルで見られる「内と外の区別」も同様である。加えて、冬の短い雨季には洪水が起こりやすいという天候のもと、オアシスの水路が集落の生活を支えるものとしてそこら中に根付いていることも指摘した。

次に、同じイバード派の集住地として、松原講師はチュニジアのジェルバ島についても触れた。空間の閉鎖性などに違いはあれども、ミナレットの形状や、白くてもっさりとした外観などジェルバ島のファドゥルーン・モスクにおけるガルダイヤとの類似点を指摘した。

総じて、ル・コルビュジェというと均質性を帯びたモダニズムに着眼しがちだが、ロンシャンの礼拝堂のように集落の魅力が感じられるヒューマンな空間も見落としてはならないだろう。また、オアシス空間の豊かさや水利用の知恵は現代においても参考になるものが多い、と結んだ。

後半は、近藤講師がオマーンに注目し、イバード派の建築に関する諸規則や現代のオマーンが直面する文化遺産保護のあり方について述べた。古くから人々が生活するオマーンでは、沿岸部と内陸部で建築の特徴を大きく異にし、伝統的な集落の形がいまだに残存しているところも多い。その中で、モスクが有する静かな威厳や外面よりも内面を重視する建築・集落の特徴はイスラーム的価値観、イバード派らしさの表れともいえるかもしれない。またイバード派は建築に関する諸規則として、他宗派と同じく、害の回避と私空間の確保を重視する特徴もある。

内陸部の町を構成するハーラと呼ばれる地区は、2009年までの登録で850近く残存しており、個人の社会的帰属の単位でありながらも伝統的な居住としての貴重な存在である。地区内の集住パターンは町ごとに様々で、監視塔、集会所サブラ、モスク、共同浴場などから構成される。

この豊かな伝統文化資源に対し、オマーン政府は「オマーン人」のアイデンティティ形成に資する自然・文化遺産の保護や、観光資源としての遺産の整備に努めている。しかし、現在、石油がもたらした豊かな生活のおかげで近代的な暮らしが進んでおり、伝統的な環境の中で生活することへの一般的な関心が失われつつある。特に若い世代において、当事者意識が薄いという問題がある。

国内的には、国内外の世界文化遺産を参考に、ハーラの状況を記録し、保存・修復・活用を目指すなど保全に努めている。一方で、国外に対しては、海外大学の事業などと連携しつつ、ガイド付き体験ツアーを計画し、またかつての海洋帝国としての責任として東アフリカ諸国の遺産保護のための資金援助などが実施されている。しかし、新型コロナウイルス感染症流行のため落ち込んだ観光業などの回復が現在の喫緊の課題として存在する。

現在において便利で豊かな暮らしの隙に、かつての伝統的な暮らしが抜け落ちていくことから私たちは目を背けてはならない。美しい遺産と共存すべく今後も方法を探りゆく必要があるのかもしれない。

（山本つかさ・東京大学法学部）

第10回　11月27日（土）

『イランの俗信』　　竹原 新（大阪大学）

本講演では、「イランの俗信」をテーマとして大阪大学の竹原新教授による解説があった。俗信について、日本においても「霊柩車を見たら親指を隠せ」「墓場で転ぶと死ぬ」というようなものが存在するように、俗信を素直に信じることは人間にとって普通の反応であり、「イスラム教の国」として知られるイランにおいてもそれは同様であるという。このような俗信について、本講演では民俗学の観点から、①イランの俗信の呪力の原理は「異世界との接触」である、②俗信は芸術の原点ではないかという２点について多数の事例を交えつつ解説が展開された。

まず、俗信研究の分野では俗信は「兆」「占」「禁」「呪」の４つに分類される。そして共通する性格として、科学的因果関係とは異なる原因と結果が含まれる。例えば「紙にペンで40人の禿の名前を書いて大きな木に吊るすと天気が良くなる」というのは日本のてるてる坊主に似ているイランの俗信であるが、「紙にペンで40人の禿の名前を書いて大きな木に吊るす」というのが原因であり、「天気が良くなる」というのが結果にあたる。両者には科学的な因果関係はないものの、俗信という形式で広く信じられているという。

イランの俗信には以下のようなものが存在する。「妖怪ジンがくれたという髪の毛をある異邦人が身につけているとジンからの被害がなくなった」「もしマルデズマーという妖怪をみたら、退散させるために袋作り用の針といいなさい。そうすればマルデズマーは逃げていくだろう」「『ベスメッラー』と唱えたらジンは退散する」「サナンダジの荒野にある種類のネズミがいて、そのある部分の骨を取り出してその骨で女性あるいは多数の女性に触れると、その女性たちに好かれるようになる」「もし誰かの家で猫が出産したら、その家の主人は巡礼に行くと信じる者がいる。つまり、その子供ができた猫が吉なのである。だから出産が近い猫を誰も追い出さず、その家で産ませるのである」「人が死んで埋葬する際、一羽の雌鶏か雄鶏の頭を墓の側で切る所がある。そしてその死骸を墓の上に埋める。こうすることで、『この鳥の血によって親類縁者が死ぬことはなくなった』と言われる」。

列挙したイランの俗信に妖怪や動物が

出てくることからもわかるように、人間界とは異なる存在が描かれたものとなっている。そしてこのような異世界の要素が含まれる俗信は日常生活にも密着したものが多い。例えば上記俗信にも登場する妖怪ジンはどこにいるかわからず、壁の中や庭にいるかもしれないとされている。それゆえ壁に釘を打つときや庭にお湯を捨てる時に妖怪ジンを怒らしてしまう可能性があり、ベスメッラーと唱えてから行うという。このように俗信を通して日々の生活で異世界が感じられるという。

また、次のような俗信も存在する。「子供の乳歯が抜けたら庭に埋めるとその子供が長生きする」「子供が生まれたばかりの女性に母乳が十分でないとき、髪を胸の上ですくといい」「手のひらがかゆくなったら、家の長男の頭と髪の毛にこすりつけると金持ちになる」「結婚式の前日、新郎新婦と列席者の手をヘンナで染めると、結婚式がより幸福なものになる」「娘が結婚せず家にいるとき、布に結び目を作りながら、『娘のいたずらな運命よ、去れ』と言う。そしてその布を荒野の遠いところに持っていって投げる。しばらくすると娘の運は開き結婚できる」「性悪な女は、友人や親戚の娘に結婚させないためにその娘の家で娘の服をピンで留める。そうすると、娘は結婚できない。しかし娘がピンに気がついてピンを外すとすぐに結婚する」「聖廟の木に紐をくくりつけ、自然にほどけた時に願いが叶う」「結婚式で花嫁がはいというときに、性悪な女はハサミを隠し持って開閉する。すると花嫁は不幸になり離婚することになる」「新郎と新婦の頭上で白い糸を布に縫い付けると姑の口が閉ざされるという」「妻が野菜とチーズとパンを随時食べると、夫は二番目の妻と結婚しない」「イランでは新車を買った時、その車と持ち主に悪いことが起こらないように、生贄を捧げる。つまり、羊あるいは金銭的に余裕がなければ雄鶏を屠り、その血を車の全部やタイヤ、あるいはナンバープレートに塗る。さらに金銭的余裕がないなら卵でもよい」「邪視よけのために卵と炭を用意して、親戚全員の名前を書いていく。卵が割れたら少しの黄身を子供の足の裏に塗る。その後卵を四つ辻に持っていって捨てると邪視から解放される」。このように生まれてから死ぬまでの生活が現代でも俗信と密着しており、本講演でも竹原先生がイランのカーシャーンで撮影された、実際に紐がくくられた聖廟の御神木の写真や、白い糸を新郎新婦の頭上で布に縫い付けようとする結婚式場での様子の写真などが例示された。

またイランには水をいれて頭から被るといいことがおきると言われ、40本の手が出た盃が存在するという。この俗信に出てくる「40」という数字や「水から出る手」といったキーワードはイランの昔話「忍耐の石」にも共通して出てくるものであり、今でもイランのデザインに手が用いられることが多いという。

以上のような大量の俗信はどれも人が不幸や病気を避けて幸せになるためのものであり、一種の言語芸術であると言える。あえて芸術に引きつけると、俗信の伝承者が表現者であり、受け手が鑑賞者であろう。俗信は、言葉を媒介とした、人間の精神を制御するための表現物なのであり、芸術の観点から見るに十分なものではないか、ということで講演は締めくくられた。

（安原尚紀・東京大学文科I類）

第11回　12月4日（土）

『中世イスラムの食卓』

尾崎 貴久子（防衛大学校）

中世イスラムの料理書は、当時の個人の生活の一側面を分析する手がかりになるということで、料理書の概要・研究史・成立背景とともに医学書や漢文史料、執筆動機などを組み合わせて何が見えてくるのかについて講義が展開された。

まず、料理書とは材料の選択から盛り付けまでのレシピの集成である。編者の特性としては、10世紀は侍従医などのアッバース朝宮廷関係者が主であったが、13世紀になると都市のウラマー層にまで広がることとなる。執筆された地域は、やはりその時代の最も繁栄した都市であり、10世紀はバグダード、それ以降はダマスカスやカイロ、スペイン・アンダルスとなる。現在10世紀から15世紀に編纂された8書が料理書として現存しているという。

イスラムの中世食文化は、料理書の形で9世紀から既にまとめられていた。10世紀の料理書が9世紀のバクダードの宮廷料理書を数多く参照していたわけであるが、現存するものはないという。

料理書をめぐる研究は1990年代から盛んになり、近年英訳も多くされている。今後は料理書と食に関する文献の記述内容や考古学調査遺物とのつきあわせが必要になるという。食に関する文献とは、具体的に医学百科全書や食養生書、本草書、農書、歳時記などを指し、料理とスパイスの関係、料理と治療の関係、各地の料理の関連などを読み解くことができる。考古学調査遺物からは、どのような形態の料理が食されていたのかなどがわかるという。例えば平皿の土器が発見されると、多人数でとりわけて料理を食べていたこと、乾燥食品を一時保存していたことがわかる。また、料理書には計量単位としてディナール金貨の枚数が用いられているのだが、王朝によってディナール金貨の重さが異なるため、発掘調査によって用いられた調味料などの計量を知ることができる。

料理書そのものが成立した理由としては、外食文化を背景に何をどのように食べるかの規範が社会に定着したことが挙げられる。アラビアンナイト第26夜では逢瀬のために食事をデリバリーする様が描かれており、そこからは外食文化が当時発展していたことが窺われる。そして、多様な食材を鍋にいれて加工調理するという技術は紀元前17世紀のメソポタミアから受け継がれたと考えられる中東独自の食文化であり、そうした技術が書物を通して伝承されてきた。食事マナーも存在し、アラビアンナイト第28夜では食後に手を洗わず花嫁に指を切断される様が描かれている。このような規範・技術が成立したことで、食についての知を、料理書を通して継承する意思・必要性が生まれたのだ。こうしてバグダードの宮廷文化は一般に広がっていく。

では具体的にどのような料理内容が記載されているのだろうか。料理としては煮込み料理が多いが、それ以外にも揚げた乾燥料理、ハリーサという粥料理なども存在する。料理の名前はペルシャ語かアラビア語のいずれかであり、ペルシャ語の料理名からはササン朝ペルシャの影響を受けていることがわかる。味付けでは酸味と甘みの掛け合わせによる肉料理が好まれたという。

次に料理書の歴史である。料理書研究は社会史の一部であり、同時代の史料類と合わせることで日常の食生活の様相が明らかになってくるという。同時代の史料にはまず医学書が挙げられる。イスラム医学は、①古代ギリシャ医学の体系化、②圧倒的な数の薬剤の種類、③粉薬や錠剤、シロップといった薬剤の形状の多様さという特徴を持ち、サラディンの宮廷医が12世紀に記

した『レモンの書』からは、古代ギリシャ医学にはなかった、病人のための美味しい料理・飲み物による食事療法をイスラム医学は確立したという自信をイスラム医学者らは手にしていたことが窺われる。14世紀地理学者がアレッポの富裕層の食行動を描写した文書の中でも、ペスト対策に一般人が食事療法を取り入れていることが描かれており、イスラム医学の確立により何を食に選ぶかという食養生法が確立して一般人にまで広がっていることがわかる。

同時代の史料には漢文史料も含まれる。元代の『居家必要事類』や明初の『回回薬方』といった漢文史料には、アラビア語ペルシャ語の料理・飲料が登場する。これはイスラム世界の料理・医学が東アジアにまで伝播していることを示している。14世紀のイブン・バットゥータの大旅行記には杭州にムスリム料理人がいたことが描かれているほか、明代の元曲選には回回人の奴隷にされた漢人が登場し、ムスリムはにんにくや臭いニラ、小麦麺ばかりたべていると中国の都市庶民がみなしていたことが窺われる描写となっている。

各地の歴史資料史料からは、13世紀から15世紀にかけて東は中国、西はスペインで同じ料理が食べられていることが判明している。中世イスラムの料理は地域的に広がりを見せ、それぞれの各地で定着していったのだ。このように料理の継承は、歴史・記憶の継承であり、継承されたものから当時の人々の生活の一断面を垣間見ることができるとして講義は締めくくられた。
（安原尚紀・東京大学文科I類）

第12回　12月22日（水）
『アラビア語圏における国際法：イスラーム法の遺産と国際法の遺産』
沖 祐太郎（九州大学）

今回のセミナーでは、九州大学国際部の特任准教授であり、日本と中東の大学の交流や、相互の留学の支援をされている沖祐太郎先生が登壇された。テーマは「アラビア語圏における国際法」であり、近代エジプトが、ヨーロッパで体系化された国際法を受容するにあたり、前近代のイスラーム世界が持っていた「遺産」である法秩序とどのようにかかわってきたのかを詳説した。

講演の始めでは前提として、国際法やその受容の定義についての説明があった。本講演における「国際法」とは、ウィーン体制以後の安定期の近代ヨーロッパでできた、法的主体としての主権国家を対象とした法であり、条約や慣習国際法を法源としている。一方でイスラーム世界では、イスラーム法が適用されるダール・イスラームと、適用されないダール・ハルブを定めたSiyarのほか、西欧諸国との関係から生まれた、キャピチュレーションなどに関する慣習的な取り決めも、ある種の国際法として存在していたと考えることもできる。しかし、こうした前近代のイスラーム世界の知的遺産が、ヨーロッパの知的遺産である「国際法」が受容される過程でどのような役割を果たしたのかは定かではない。一般的に国際法の受容については、書籍の翻訳や大学教育による「学説の受容」と、国家実行や私人の言及といった「国際法の使用」とが重要な指標となる。国際法受容の歴史に関しては、アラビア語圏の法学・社会科学の雑誌ではほとんど言及がない。一方で非アラビア語圏では、国際私法を中心に受容されたのではないかという議論がなされている。しかし、この見解は必ずしも正当なものではない。

これらの前提をもとにまず、「国際法学説の受容」の実例が紹介された。エジプトに法学関連の書籍が流入するルートは主に２つあり、欧米諸国語の書籍がオスマン語からアラビア語に翻訳されるパターンと、欧米諸国語からアラビア語に直接翻訳されるパターンとがある。書籍の編纂方法の特徴としては、国際法の専門家以外が書いた、あまり体系的でない書物も取り入れられていること（例：オーストリアの東洋研究所の所員、シュレクタの卒論をまとめた『国際法論』）、西洋の様々な書籍の記述を、イスラーム世界にとって重要な情報を選択して、折衷して一つの書籍を作っていること（例：ハサン・フェフミーの『国際法要諦』、アルスラーンの『諸国民の法と国際条約』）が挙げられる。これらの本では、伝統的なイスラーム世界における国際法ともみなされるものや過去の外交的規範への言及はみられない。イスラーム法ではなく、近代ヨーロッパの知識を受容した新しい形の知識人が、あくまでヨーロッパの規範に沿って書いたものだということがわかる。

次に、「国家実行」の実例が紹介された。国際的な地位を高めるための国際法遵守はエジプトでもみられるのだが、国際法実行の主体となる政治体が同定しづらいことが議論を難しくしている。例えば、エチオピア遠征時の捕虜殺害、白旗無視、日露戦争の中立宣言などは、国際法に強くかかわってくる行為だが、イギリスに占領されていた時期の出来事であるため、エジプトの国家実行とは言いづらい部分がある。一方で私人の議論においては、国際法に基づく議論を補強する形で、否定的ではあるものの、イスラーム法への言及が見られる。例えば、アフマド・ルトフィー・サイードは、青年トルコ革命後のオスマン帝国の議会に、ワタン党が議員を派遣しようとしたことを批判した。その際、「イスラームの地はすべてのムスリムの祖国という帝国主義的な考えから、オスマン帝国へ議会を送るのでは、対内主権の喪失につながってしまう。エジプトは対内主権においてブルガリアと同等なのだから、議員を送らないでよい」と述べた。これは、イスラーム法におけるウンマの否定であると同時に、『諸国民の法と国際条約』の記述の引用も含んでいる。

まとめとして、書籍の翻訳に関しては、西洋法学の多様な知見を折衷して取り入れられているが、イスラーム法の遺産はあまり引かれておらず、アラビア語の国際法体系書でもイスラーム法のことは述べられていない。しかしながら私人の議論においては、イスラームの慣習的な国際法に対する一定の理解が示されている、ということだった。

質疑応答では、エジプトとオスマン帝国、西洋諸国の人的交流、および書物のやりとりについて活発な議論がなされた。例えば、「前近代からヨーロッパと外交関係があった中東では、東アジアとは違い、国際法の制定前に実務としての外交秩序があったほか、官僚も西欧諸語の法を原語で読んでいたので、翻訳の必要性が小さかったのではないか？」という質問に対しては、「知識人や外交官の教育・実務では、原語での理解が中心になったが、国内での適用には、アラビア語で訳さなければならなかった。国内の紀要や、個々の軍人が遵守する戦争国際法は、アラビア語で書かれることが多かった」と回答された。また、「西欧への地域を超えた移動の体験が国際法の原動力になったのか？」という質問に対しては、「フランスへの留学生受け入れプログラムで、現地の授業を聴講しての知識の習得が活かされたこともある（例：サイードのスイス留学）」との回答があった。
（上笹のぞみ・東京大学教養学部統合自然科学科認知行動科学コース）

第13回　2022年1月12日（水）
『ムスリム知識人が問い直す伝統と近代：エジプト的な宗教認識を軸として』
黒田 彩加（立命館大学）

今回のセミナーでは、現代の穏健派・中道派のイスラーム知識人の改革思想を研究している、立命館大学の黒田彩加先生が登壇され、アメリカ在住のエジプト系知識人、ハーリド・アブルファドルの思想を紹介された。

講演の始め、講師は研究の背景について説明された。エジプトでは、近代の西洋法の流入による世俗化、アラブ・ナショナリズムの勃興により、イスラーム法の影響が弱くなっていった。しかし、1960年代末からイスラーム復興運動が起こり、近代化した社会に疑問を呈しつつ社会の趨勢に合わせたイスラームの在り方が問われることになった。講師は、イスラーム思想に通底した知識人のうち、ムスリム同胞団に属していない在野の穏健派に焦点を当ててきた。その中で、これまで研究してきた思想家とは異なる特徴をもつアブルファドルに関心を持つようになった。

次に、イスラーム法およびアブルファドルに関する基礎知識の確認があった。イスラーム法とは、神が授けた法シャリーアの理解と実践を目的としたもので、クルアーンや伝承ハディースの正確な理解を必要とする。近年、法学の大衆化により、非専門家の勝手な解釈や、厳密な字句主義による初期イスラームへの回帰を志向するサラフィー主義が横行している。そうした時代の中アブルファドルは、クウェートやエジプトで受けた私的な宗教教育、アメリカでの法学教育をもとに、宗教学者や一般ムスリムに向けた著作を多く残している。

次に、講師はアブルファドルの思想の特徴について説明された。

アブルファドルは、イスラーム的伝統と近代社会との超克を目指すウラマー（知識人）を幅広く評価している。主に影響を受けたり交流を行ったりした知識人としては、典拠の薄弱なハディースを排除せんとするガザーリー、字句として残るクルアーン的事実と可変的なイスラーム的事実の峻別を主張するアルクーンなどがいる。こうしたウラマーとの交流の他、ウェブサイトやYouTubeを活用して、アメリカ在住の一般ムスリムや非ムスリムへの啓蒙活動を行っており、イスラーム思想における思いやり、平和、愛の重要性を強調している。

アブルファドルは、近代エジプトのサラフィー主義の蔓延を、「シャリーアの理性的な分析ではなく、字句を重視した見せかけの敬虔さが広まるようになった」と批判している。こうしたイスラーム思想の衰退は、植民地主義だけが原因ではなく、ムスリム自身の社会構造の変化によりもたらされたものだとしている。イスラーム法学を取り戻すためには、国家による接収が進み、サラフィー主義の蔓延を助けているワクフ（寄進制度）を国家から独立させ、宗教研究や教育のために活用するべきだとした。彼はまた、ムスリム自身も、女性差別や音楽をハラームとみなすことなど、正しくないかもしれない伝統を自明視しているため、反知性主義が広まりサラフィー主義の無批判な受容をもたらしたのではないかと述べている。特に女性の統治者の是非については、ブハーリー真正集に典拠があるものの、他の典拠や歴史的文脈と照らし合わせた場合、無批判に正しいとは言えないのではないかと主張する。こうした良心と対立しうる典拠については、ムスリム個人が考察のために立ち止まるべきだという。一方で、イジュティハードによる非専門家の勝手な解釈も批判しており、過去の解釈学におけるイスラームの伝統の考察に取り組んだうえで、伝統を再構築することが必要であるとしている。その意味で、法学の歴史的実践を無視するオリエンタリストの思想は、サラフィー主義と表裏一体だと述べている。

最後にシャリーアと近代法学との折り合いについて、イスラーム法学は、人間の解釈を含んでいる以上不完全であり、国家が介入して神聖視するものではなく、市民の間で共有され、平和や愛を追求する道しるべになるとした。この際の国家の役割は、市民のシャリーアに関する議論を市民の権利を侵害することなく支援することだと述べた。

質疑応答では、アブルファドルの思想の特徴について、さらに活発な議論がなされた。

非専門家のイスラーム法学とのかかわりについて、アブルファドルがどう思っているかについての質問では、「十分な専門知を習得する修行を積んでいない一般人では、イスラーム思想自体の改革は難しい。しかし、あらゆる行為の判断をウラマーにゆだねるという権威主義的な態度は批判しており、個人の良心に照らし合わせた価値判断も、専門知と同じく重要視している」と回答された。アブルファドルの著作の対象と論調については「主に、アメリカの宗教学者と、一般人のムスリム、非ムスリムを対象として書いている。彼個人の解釈が含まれているという留保を入れつつ、過激な主張をするのではなく、イスラーム思想の根本的な価値観をわかりやすく説くようにしている」と回答された。

（上笹のぞみ・東京大学教養学部統合自然科学科認知行動科学コース）

4. バフワーン文庫より
—5年目の節目にこれまでの文庫の軌跡を振り返る（後編）

倉澤 理（バフワーン文庫特任研究員）

前号（第19号）掲載のこの回顧録の前編には文庫の立ち上げの1年間をつぶさに書き綴りました。この後編にはそれ以降の経過を記したいと思います。

業務について

2018年2月に「仮開室」として試験運行を始めたバフワーン文庫は5月の連休明けに貸出業務を伴った本開室へと移行しました。まだ蔵書が少ない状態でしたが、貸借に利用者が訪れ、文庫は順調に滑り出しました。私の業務内容は、1年目の立ち上げ・準備の段階から次第に落ち着いたものとなっていきました。

月・水・金の勤務日に10時までには文庫に出勤します。12時から17時まで開室をしますが、来訪者を待ちつつ、私は諸々の事務作業を行います。17時の閉室時間を迎えますと、閉室の準備に着手し、18時に文庫を退勤します。

新たな利用者の登録や、図書の貸出手続き・管理など業務は様々ですが、特に時間を割くのは、図書の登録作業です。購入あるいは寄贈で文庫に入ってきた本は一旦駒場図書館に搬入をし、バーコードつきの資料番号が付与されます。付与の終わった本が戻ってきますと、所蔵登録の作業に取り掛かります。これは最終的にインターネットの検索システムで検索できるようにするためのものです。アラビア語・ペルシア語などの特殊文字資料に関しては、既存のデータのないもの（他の図書館で所蔵のないもの）は、資料のタイトル・著者名などのアラビア文字とそのローマ字翻字を打ち込み、出版地・出版社・出版年、ページ数・サイズなどのデータを入力したうえで、文庫独自の請求番号を入力します。

私が作成したデータは、駒場図書館のスタッフの方がチェックしてくれます。そのチェックが終わりますと、漸くインターネットで検索できる段階に至ります。文庫の本が様々な人に手に取っていただける状態になるには、駒場図書館のスタッフの方々をはじめ、多くの人の手助けが必要となります。前回にも記しましたが、これらの方々の献身的なサポートには感謝の言葉しかありません。

本の選書と購入

様々な業務のうち主なものの１つが文庫で購入する本の選書と、書店との購入に関するやり取りです。１年目から行っている辞書、レファレンスなどいわゆる工具類の書籍の拡充を引き続き図りつつ、アラビア語・ペルシア語・トルコ語の原著を幾つかの書店から購入するとともに、欧語・日本語で書かれた翻訳書、研究書の充実にも取り掛かりました。

2018年度は主に原著の翻訳書の蒐集に重点を置きました。

難易度の高いアラビア語・ペルシア語などの中東諸言語は文法を習得しても、読みこなすのに時間がかかり、初習者の堅実且つ正確な読解には翻訳があるのが望ましいです。前期課程の学部生が多く所属する駒場キャンパスに立地する図書室という点からも、専門性の高い書籍よりも、中東研究への間口を広くするような書籍を取り揃えるのが当時の課題でした。このような考えのもと、イスラーム及び中東のキリスト教の古典の対訳本などを、この年は選書し、文庫の新たな蔵書として加えました。

和書の蒐集に関しては、研究に直結せずとも、研究へのモチベーションの維持に繋がるよう、古典のみならず近・現代文学、音楽、美術、衣装、食などをはじめ、文化面の書籍の充実にも力を入れました。オリンピックを控えていることもあり、来日するイスラーム教徒も多くなるかもしれないと考え、ムスリムの来訪者を案内することになった人が参照できるようにと、ハラール、ハラールビジネス関連の書籍も意識して揃えました。

様々な人々が訪れるこのキャンパスで、中東研究の従事者ではなくても、個々人の事情に合わせて文庫の本を活用いただけたら、文庫の存在意義という意味において、これほどうれしいことはありません。

駒場キャンパスに属する学生にとっての使い勝手の良さを第一に文庫を整備する一方、東大にいくつかある中東関連の書籍を所蔵する図書室――本郷の「東洋文化研究所」、「イスラム学研究室」、「東洋史学研究室」などの図書室――と異なる独自色を、バフワーン文庫にどのように出していくかというのも課題の１つでした。東京外国語大学のアラビア語科出身の私が考えたのは、「アラビア語学」にまつわる原著、研究書の基本文献がひととおり揃っている図書室としてバフワーン文庫を整備するというものでした。

2019年度はアラビア語・ヘブライ語などいわゆるセム語派の言語に関する欧米の研究書のシリーズをひととおり揃えるとともに、紀伊國屋ドバイ店の協力を得て、「アラビア語によるアラビア語学」の基本的な古典を調達してもらいました。

2020年度は、コロナ禍の最中、世界情勢の構造の変化に伴い、様々な出来事が中東に起こり、その結果を受け、パレスチナ関連の研究書籍を重点的に蒐集しました。その際、少し違った角度からこの問題を見ることができるような書籍の蒐集を心掛けました。どうしても「近現代史の出来事」の経緯に沿って語られがちなパレスチナ問題ですが、この問題によって文化面並びに言語の面でどういった事が起きているか、多面的な洞察が可能となるような研究書を選書しました。

このように様々な書店の献身的な協力のおかげで、アラビア文字資料、洋書、和書を問わず、様々なジャンルの書籍を取り揃えることができました。文庫は単に研究のために必要な本を借りるだけの場所ではなく、研究に疲れた時の箸休めや新たなヒントを求めて、書架にある本をふと手に取ってみたくなる、そのような場にもなっているはずです。

ご寄贈いただいた本について

バフワーン文庫所蔵の書籍は、寄贈によるものも数多あります。

前回のエッセイで記したように、2017年５月下旬に東大駒場キャンパスで開催された第８回イバード派研究国際会議の折には、オマーンの宗教大臣顧問のアブドゥルラフマーン・アル・サーリミー氏をはじめ、会議に参加した様々な方々からアラビア語、英語、フランス語の書籍を寄贈いただきました。

2018年には駐カタール、オマーン大使を歴任され、またアラブ文学の翻訳家としても著名な塙治夫大使（平成28年ご逝去）の蔵書が、当時東京大学東洋文化研究所教授で中東地域研究センターの副センター長でもあった長澤榮治先生の取次ぎで、明子大使夫人らのご厚意により文庫へ寄贈されました。寄贈された書籍はアラビア語を主に800冊余り。古典文学・現代文学はもとより、お仕事の都合で蒐集されたものと思われる主な中東各国の指導者の発言録などの時事関連のものなど、20世紀の中東政治史を知る上で欠かせない図書が文庫の所蔵に加わりました。

また、中東地域研究センターに山内昌之先生より、アラビア語・ロシア語・トルコ語をはじめ、膨大な書籍をご寄贈いただきました。

中東地域研究センター所属の森元誠二元オマーン大使も、文庫の書籍の充実には多く携わっています。ご自身の著書を寄贈いただいただけでなく、2019年秋には大使の仲介で先述のオマーンの宗教大臣顧問アブドゥルラフマーン・アル・サーリミー氏から80冊ほどのオマーン及びオ

マーンの宗派イバード派に関連する書籍を寄贈いただきました。

2020年2月には、現オマーン国王のスルターン・ハイサム陛下から直々に、アラビア語のものを主として230冊余りの書籍を賜りました。この下賜も、森元大使の尽力により実現したもので、文庫の設立も含め、文庫が同大使に負うところは大きなものがあります。

そして2017年の文庫の整備の段階から大変お世話になっていた、前中東地域研究センター長の杉田英明先生からも数多くの図書をいただきました。2021年春、先生は退官されましたが、その折にご自身の様々なコレクションを文庫に寄贈くださいました。殊に先生が時間をかけて集めた明治期から日本で出版されたアラビアン・ナイトにまつわる貴重な書籍（翻訳やアラビアン・ナイトを題材にした関連書籍など）は、文庫の棚の一角を飾り、訪れる人を驚嘆させるとともに、先生のような一級のアラビストを目指す者に研究者としての気概とは何かを示唆する蔵書となっています。

終わりに

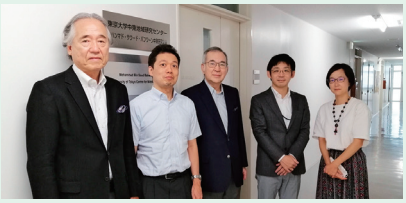
2年にわたるコロナ禍においても、色々な方の献身的な支えによって、バフワーン文庫は着実に蔵書を増やし、配架スペースをどうするかという贅沢な悩みを抱えるまでに至りました。にもかかわらず、感染状況によって、再び長期の在宅勤務を余儀なくされるかもしれないという懸念から、（在宅勤務期間中の悪天候による窓ガラスの破損を危惧して）窓近くの棚に本を置かないようにしている都合上、棚に並べることができず、段ボールに収納されている書籍が多々あります。

棚を目一杯使用して、これらの本を並べることのできる日が果たして来るのだろうかと、本が詰まっている箱を眺めながら私は思います。そして、利用者の皆さんが自分の好きな時間に訪れ、思う存分文庫に浸れる日は来るのだろうか、また私がそのような方々と（お邪魔にならない程度に）心おきなく会話し、交流できる日が再び来るのだろうか…オミクロン変異株によるものとされる第6波到来が言われる中、私はひとり文庫に佇み、物思いに沈みます。きっと遠からず来るであろうその日のために、今は粛々と準備を進めて参ります。

5. センターの活動紹介

山内昌之先生ご来室

UTCMES初代センター長である山内昌之先生がご来室されました（2021年10月5日）。山内先生からは貴重な書籍をセンターに寄贈いただき、現在「山内文庫（仮）」として整備中です。



＊追記＊

本誌第17号に掲載された『三木亘先生著作目録』の中で、書誌情報不明としていた「くろはさんのためのレクイエム」は『静岡県近代史研究会会報』107号，1987年8月10日，5-6頁に掲載されたものでした。読者の情報提供に感謝します。

●UTCMESスタッフ紹介　（2022年3月31日現在）

〈スタッフ〉

高橋　英海（センター長、兼務教授）
森元　誠二（客員教授）
宇田川　彩（特任助教）
瀬口　美加（事務補佐員）
大塚　修（兼務准教授）
鈴木　啓之（特任准教授）
倉澤　理（バフワーン文庫・特任研究員）

〈UTCMES運営委員〉

高橋　英海（委員長、総合文化研究科教授）
受田　宏之（総合文化研究科教授・副研究科長）
真船　文隆（総合文化研究科教授）
菊地　達也（人文社会系研究科准教授）
大塚　修（総合文化研究科准教授）
橋川　健竜（総合文化研究科教授・グローバル地域研究機構長）
黛　秋津（総合文化研究科教授）

〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋　英海（委員長）
橋川　健竜
大塚　修
真船　文隆
受田　宏之
黛　秋津

●発行者情報　UTCMESニューズレター VOL.20　2022年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター（スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座）
〒153-8902　東京都目黒区駒場3-8-1　TEL：03-5465-7724　FAX：03-5454-6441
http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/　Twitter @UTCMES

印刷：佐川印刷株式会社
〒140-0004　東京都品川区南品川5-2-10　TEL：03-5715-0912　FAX：03-5715-0931